

『萬葉集』 卷十三左注の方法

村 本 春 香

一 はじめに

『萬葉集』卷十三では、基本的に題詞が付されない。それは、この巻が、作者等、歌に関する事情を一切提示せず、いかにして歌を並べていくのか、そのことと向き合っている巻だということを意味する。この時、卷十三は、題詞に代わって左注が、「右○首」と括弧することで歌群を形成する。題詞を持たない歌が連続する以上、この形式に、歌群の区切りを明確にするという便宜上の要請があったのは確かだろう。しかし、それ以上に、歌の組合わせを重視する巻の姿勢と、大きく関わって働いている点を考える必要があるのではないか。それは、「右○首」とした時、異伝歌もあわせて数えあげているからだ。他の巻では題詞で歌群の切れ目を示す場合、石見相聞歌や泣血哀慟歌のように、

歌数の中には異伝歌が含まれないのが普通である。しかし、後述するように、「右○首」と括られた時、本伝歌は異伝歌に対して、完全な優位性を持ち得ているとは言いがたい。卷十三に関しては、本伝歌と異伝歌の關係のあり方、そして、それが巻としてどのようにあらわされているのかについて、なお検討しなければならない点が多いのである。

卷十三には、「或本曰」等のかたちで異伝歌が付されるものは九歌群存在する。以下では、「右○首」と括られた中で、本伝と異伝それぞれの短歌が、長歌との関わりなのかでどのように働くのか検討することとする。そうすることで、歌がいかに多義的であるかが明らかになるであろう。

また、一方で、異伝關係にある歌が、異なる場所に存在することを注意する左注もある。これは、多義性への不審をあらわすものだとして、一応は理解できる。それ故、歌の多

義性を容認する「右○首」という左注とは矛盾するようにみえる。このような左注は、異伝歌を含めて括る左注とどのような関係にあるのか、併せて検討する必要があるだろう。

二 歌の多義性を容認する左注

次嶺經 山背道乎 人都未乃 馬從行尔 己夫之 步從行者
每見 哭耳之所泣 曾許 思尔 心之痛之 垂乳根乃 母
之形見跡 吾持有 眞十見 鏡尔 蜻領巾 負並持而 馬替
吾背

反歌

泉川渡 瀬深見 吾世古 我旅行 衣蒙沾鴨

(卷十三・三三一五)

或本反歌曰

清鏡雖持吾者 記無君之步行名積去見者

(卷十三・三三一六)

馬替者妹步行 將有縦惠八子石者 雖履吾二 一行

(卷十三・三三一七)

右四首

この歌群は、「問答」の部立に収録されているが、その「問答」がどのように成立しているのか、定説をみない。これは、「或本反歌曰」のかかる範囲が曖昧なことによる。

このことについて、『代匠記(精撰本)』は、「此ハ初ノ一首ノ事ナリ。其故ハ後ノ一首ハ夫ノ答歌ナルヲ以テ問答ニ入レタレハナリ。其上夫ノ歌ナル故、長歌ノ同シ意ニアラス」と述べる。三三一七番歌だけが夫の歌で、問答が成立するのはこの歌があつてこそのことであるから、本伝歌に該当する。それ故、「或本」に収録されているのは三三一六番歌のみだといふのである。しかし、異伝歌が本伝歌に挿入されるような形式を卷十三ではとっていないことを見逃すわけにはいかない。

確かに、三三一七番歌のみが男の歌であり、三三一四番歌が「馬替へ吾が背」と詠みかけたのに対し、唯一「馬替はば妹步行ならむ」と答えている。しかし、妻が夫に同行する三三一七番歌は、「旅行き衣蒙れ沾たむかも」と夫の様子を家郷で推量する三三一五番歌には応じようがない。同時に、三三一六番歌との間に同じ「步行」の語をもつて唱和が成立していることを考えれば、やはり「或本反歌曰」は、三三一七番歌も含めたこの二首にかかるとすべきだろう。つまり、この歌群が問答として成立するのは三三一七番歌、即ち異伝歌があるからなのだ。

『代匠記』はじめ、このことを不審とする注釈書は多い。それは、「或本」の歌というのは、あくまで参考程度に過ぎないとの先入観に縛られているからではないのか。⁽³⁾しか

し、そうではなく、本伝歌が異伝歌に対して完全な優位性を獲得していないことを認めるところから、この歌群の検討を始めるべきなのだ。そうすれば、異伝歌は参考などではなく、本伝反歌と組合わせられた時とは異なる長歌の世界を提示するためのものであることに気付くであろう。どういうことか。

端的に言えば、長歌は、本伝反歌と組合わせられると一人旅を、異伝反歌と組合わせられると二人旅をいう歌へと変貌するということである。これは、長歌が多義的であり、この多義性をあぶりだすのが異伝歌の存在だということを示している。なぜなら、本伝反歌しか存在しなければ、長歌はあくまで一人旅の夫が馬を持たないことを妻が嘆く歌としてしか位置付けられないからだ。このとき二人旅の可能性は排除される。しかし、異伝反歌三三一六・三三一七番歌と組合わせられれば、自分が徒歩なのには頓着せず、あくまで夫のことをのみ気遣う妻の歌になる。そして、夫は、妻がひとり徒歩で行くのを見るよりも、徒歩の旅の辛さを二人で共有する方がましだとなくさめる。問答の中で、自分のことよりも相手のことを思う二人の姿が浮かび上がってくるようになっていくのだ。結果、本伝の解釈が基本で異伝は付け足し（もしくはその逆）ではなく、長歌単独では、どちらか一方に決定できないようになってい

ることが注目されよう。この歌が異伝歌によって問答に分類されているのは、異伝歌の存在の大きさを物語るものである。

改めて強調しておきたいのは、この長歌の多義性は、そのどちらとも決定できないかたちで潜在するのであり、本伝・異伝反歌がそれぞれに長歌の世界を限定することではじめて浮かび上がってくるものでしかないということだ。

異伝歌を含めて「右○首」と括る左注は、歌の多義性と、同時にそれを特定していく歌の限定性に目を向け、その組合わせによって提示される多義的な世界を統括するものだといえよう。

三 同一歌と認定し不審を示す左注の方法（一）

異なる反歌と組合わせられることで、長歌の多義性がある。らわされる例として、他に三二六三、三二六五番歌がある。

己母理久乃泊瀬之河之上瀬尔伊杭乎打下湍尔眞
杭乎拈伊杭尔波鏡乎懸眞杭尔波眞玉乎懸眞珠奈
須我念妹毛鏡成我念妹毛有跡謂者社國尔毛家
尔毛由可米誰故可將行

（卷十三・三二六三）

檢古事記曰件歌者木梨之輕太子自死之時所

作者也

反歌

年渡麻弓尔毛人者有云乎何時之間曾母吾戀尔來

(卷十三・三二六四)

或書反歌曰

世間乎倦迹思而家出爲吾哉難二加還而將成

(卷十三・三二六五)

右三首

〔参考〕

許母理久能波都勢能賀波能加美都勢余伊久比袁宇知
斯毛都勢余麻久比袁宇知伊久比余波加賀美袁加氣
麻久比余波麻多麻袁加氣麻多麻那須阿賀母布伊毛
加賀美那須阿賀母布都麻阿理登伊波婆許曾余伊弊余母
由加米久余袁母斯怒波米

〔記〕九〇

長歌三二六三番歌は、何らかの理由で「妹」が家郷から去つてしまい、その不在を嘆くものである。このことは、本伝・異伝のどちらの反歌と組合わせられても変わらない。しかし、以下で述べるように、詠み手の置かれた状況や、「妹」への思いの質には差異も認められる。

本伝反歌三二六四番歌は、牽牛織女の逢瀬は年一回でそれに堪えているが、自分は恋しい相手とわずかの期間しか離れていないのに、恋い慕う気持ちが湧き上がつてくると詠む。この歌と組合わせられると、長歌は、何らかの理由で「妹」がいなくなつてしまつて逢瀬が期待できないこと、

そのため、詠み手自身が「家」「國」に行くことはないだろうことを詠んでいる歌として理解できる。そして反歌では、そのような状況でありながらも、「妹」を恋しく感じる想いは止まず、慕い続けている現状が示されることになる。

一方、或本反歌三二六五番歌と組合せられた場合、三二六四番歌と組合せられたときは趣が異なる。三二六五番歌は、恋を前景化することなく、「世間」をいとわしく思つて出家してしまつた詠み手が俗世に戻るつもりのないことを詠む。そこから考えれば、長歌では、「妹」が何らかの理由で「妹」が死んでしまつた可能性もある。いなくなつてしまつたために、「家」「國」といった共同体から離れ、詠み手が帰属する場を失つたことが詠まれていることになる。そこからの展開として、詠み手は反歌で宗教世界へと身を投じる。この場合、「妹」との間の恋というよりも、むしろ、共同体との関わりの方に眼目があるようにみえる。このように、異なる歌と組合せられることで、長歌の抱える様々な世界が具体的に提示されるのだ。つまり、この「右三首」という左注もまた、前節の例と同様に、反歌との組合せによって示される長歌の多義性を、容認、提示するものであつたということではないだろうか。長歌が抱えている複数の世界は、本伝反歌、或本反歌と結

びつけられることではじめてあらわされるものでしかない。「右三首」と括られることで、同じ恋歌であつても、「妹」不在の理由や、共同体との関わり方に違いがみられることが積極的に示されるのだ。卷十三では、本伝歌が完全なる優位性をもちえていないことは先に述べた。当歌群が「右三首」と括られ、長歌との組合わせにおいて本伝・異伝の差別化が行われていないのは、長歌に複数存在する歌の世界に、左注が積極的に関わりとうとするからである。

しかし、この歌群の場合は、前節の例とは異なり、長歌にも左注が付されていることが注目される。この左注は、歌の多義性とのように関わるのだろうか。長歌左注は、参考として挙げた『古事記』の軽太子歌と同一歌であるとの見方を前提に、『古事記』と『萬葉集』では詠歌事情が異なることをいうものである。それは、同じ歌が異なる事情と結びつくことに不審を抱いているからであろう。『萬葉集』には、歌とは、ある一時点で一回的に存在するものだという基本的な見方が存在するからだ。左注は、いつ、何処で、誰が詠んだのかを特定することで、歌が誕生したある時点を捉えようとしている。即ち、その一時点で歌が一回的に存在すると考えている。卷十三においても、基本的にこのような施注姿勢を踏襲した上で、注が付されていると考えていいだろう。だからこそ、『古事記』と同一の

歌が、相聞歌として載せられていることに、不審が示される。こうした態度は、「右三首」左注とは異なり、異伝を許容しないもののようにも見える。

しかし、『記』九〇との間には、そもそも複数の歌句異同が存在する。特に大きな違いは結句「誰故か行かむ」の有無である⁶⁾。この句の存在によって、衣通王が追つてきたとする『古事記』とは異なり、現在「妹」と共にある可能性が否定されるからである。このことが、反歌で「妹」の不在を嘆くことへと繋がる。つまり、この歌句の存在が、三二六三番歌と『記』九〇を別の歌たらしめているといつても過言ではない。

それにも拘わらず、左注はこの二首を同一歌と認定する。このとき、『記』九〇との歌句異同が、歌意の差異を生んでいることに、施注者が無自覚だったとは考えがたい。歌句異同に気付きながら、その異同に触れることなく、敢えて同一歌と認定していると考えらるべきだろう。結果、『古事記』の「自死」の物語が、長歌の抱える世界の一つとして呼び込まれることになる⁹⁾。二首を別個の歌とするのではなく、敢えて同一歌だとすることで、三二六三番歌が、実は、恋人の不在を嘆きながら、自ら死への道を選んでしまふ歌としても読めるのだということ、この左注は示している。「右三首」という左注は、恋歌としての多義性をあ

らわすものであった。それと同様に、「檢古事記」という不審を示す左注も、実は、長歌の多義性を具体的にあらわしてみせるものだったと考えられよう。この多義性は、歌句異同を媒介にしなからあらわされるものであり、あるひとつの歌が異なる歌と組合せられる中で示されるものは異なる。しかし、これらは別々の問題ではなく、互いに響き合い、通底するものである。

四 同一歌と認定し不審を示す左注の方法(二)

卷十三には、ひとつの短歌が別々の長歌と組合せられて重出する場合もある。以下に挙げるように、三二五七番歌の左注は、「或本」では「此歌一首」⁽¹⁰⁾が三三一八番歌の反歌となつてゐることを指摘し、「古本」によつて「累載」といふ。これも、前節の『古事記』引用の場合同様、歌群を越えて歌が重出することへの不審の表明である。異なる作歌事情が『萬葉集』の内部に存在するのか、外部に存在するのかという違いはあるが、同じ問題性を抱えてゐると考えられる。

從古言續來口戀爲者不安物登玉緒之繼而者雖云
處女等之心乎胡粉其將知因之無者夏麻引命方貯
借薦之心文小竹荷人不知本名曾戀流氣之緒丹四天

(卷十三・三二五)

反歌
數々丹不思人回雖有題文吾者忘枝沼鴨

(卷十三・三二五六)

直不來自此巨勢道柄石椅跡名積序吾來戀天窮見

(卷十三・三二五七)

或本、以此歌一首爲之「紀伊國之濱爾緣云
鯁珠拾尔登謂而往之君何時到來」歌之反歌
也。具見下也。但依古本亦累載玆。

右三首

木國之濱因云鯁珠將拾跡云而妹乃山勢能山越
而行之君何時來座跡玉榉之道尔出立夕ト乎吾問
之可婆夕ト之吾尔告良久吾妹兒哉汝待君者奥浪
來因白珠邊浪之緣流白珠求跡曾君之不來益拾登
曾公者不來益久今七日許早有者今二日許將有
等曾君者聞之々々勿戀吾妹 (卷十三・三三一八)

反歌

杖衝毛不衝毛吾者行目友公之將來道之不知苦

(卷十三・三三一九)

直不往此從巨勢道柄石瀨踏求曾吾來戀而爲便奈見

(卷十三・三三二〇)

左夜深而今者明奴登開戸手木部行君乎何時可將待

門座郎子内尔雖至痛之戀者今還金
(卷十三・三三二一)

右五首

左注が同一歌として認定する二首の間には、傍線を付したように、歌句異同がみられ、組合せられている歌や、収録されている部立(三二五七番歌は相聞、三三二〇番歌は問答)も異なる。しかし、『古事記』引用の場合同様、左注は、相違を捨象することで、異なる歌群に同じ歌が存在することを不審とするのである。この場合も、以下に見るように、歌句異同は、二首の世界の相違と、深く関わっている。左注は、それを敢えて同一視することで、その相違を積極的に見せようとするのではないか。

三二五七番歌では、「なづみぞ吾が来し」と詠んでいるが、三三二〇番歌では、それが「求めそ吾が来し」となっている。ナヅムとモトムということは、恋する相手を希求する表現であることは共通するが、その細かなニュアンスには違いが認められる。まずは、ナヅムの歌句をもつ三二五七番歌から確認する。ナヅムには、以下のような例がある。

鶏之鳴 東國尔高山者左波尔雖有明神之貴山乃
立立乃見果石山跡神代從人之言嗣國見爲筑羽乃山

矣冬木成時敷時跡不見而往者益而戀石見雪消爲山
道尚矣名積叙吾來煎
(卷三・三三二一)

(卷四・七〇〇)

從蒼天往來吾等須良汝故天漢道名積而叙來

(卷十・二〇〇一)

三八二番歌は、筑波山があまりに素晴らしいとされているので、冬の「雪消爲る山道」であつても、その道を辿つて訪れるという。七〇〇番歌で「近からぬ道」ともいうように、その行きに困難さを感じている表現だということがわかる。しかし、「見ずて往かば益して戀しみ」(三八二)などのように、難渋しながらも、対象にあまりにも惹きつけられるので、苦勞をものともせず訪れるという。「汝が故」と二〇〇一番歌で詠まれてもいるように、ナヅムことが恋する相手へのアピールとして用いられていることは確かであろう。三二五七番歌では、詠み手が恋しい相手のもとへ向かう様子が、ナヅムとされ、その困難を乗り越えても逢いに来たのだという詠み手の思いの強さが表明されていることになる。

但し、それが、長歌三二五五番歌で「人知れずもとなそ戀ふる」と詠んでいることとの間の「ズレ」となっているとの指摘がある。長歌について、窪田『評釈』では、

男の片恋の悩みを云つたものであるが、これは謂はゆる言ひ出でぬ恋で、独りひそかに心を寄せての悩みである。

と指摘する。『全注』では、このような解釈に従い、「長歌によれば相手はまったく自分の心を知らないはずであり、ズレが認められる」という。第一反歌三二二五六番歌の「數々に思はず人は有るらめど」と、長歌との間にも齟齬があるというのだ。

しかし、「人知れず」というのは「言ひ出でぬ恋」なのだろうか。「處女等が心をしらに其を知らむ因の無ければ」とあり、問題とされているのは、言い出せないということよりも、むしろ、相手の心を量りかねていることの方だろう。恋しい相手が、自分の思いを理解していないことを詠むのは集中にも他に例があり、例えば以下のようなものが挙げられる。

吾戀流 あがふる 千重乃一重母 ちぢゅうのひとへも 人不令知 ひとしれず 本名也戀牟氣之緒尔 もとみやこひむいものせに
爲而 なむ
村肝之情 むらぎものこころだけ 推而如此 おしかりあがふら 許余戀良苦乎 ゆるかあるらむ 不知香安類良武 しらずかあるらむ

(卷十三・三二二七二)

三二二七二番歌に「千重」、七二〇番歌に「かくばかり」ともあるように、恋心それ自体ではなく、その深さが問題にされている。これらの例を参考にすれば、長歌の「人知れ

ず」というのも、「夏麻引く命かたま」くばかりに思っていることが伝わっていない状況をいうものではないだろうか。それが第一反歌では、「數々に思」つてくれない相手への嘆きが、相手に直接、その思いの深さを訴える衝動へと転化していく。このように考えれば、長歌と反歌の間の「ズレ」とされているものは、煩悶から行動へという事態の進展として捉えるべきものだとということになる。

次に、モトムという歌句をもつ三三二〇番歌について確認する。この歌は、紀伊まで「鮑珠」を拾いにいった男が待ちかねている女に、夕占が二日から七日のうちには男が戻ってくるだろうことを告げたことをいう長歌を受けて詠まれたものである。第一反歌では、男を迎えにいきたいものの、道がわからないために、行くことができないことを嘆いている。そして、この第二反歌三三二〇番歌では、それでも男を探し求めて出かけてしまった、女の思いが提示されることになる。モトムは、在処のわからないものを探す意の語である。したがって、三三二〇番歌は、男のやつて来る道もわからないし、紀伊のどこにいてもわからない中、男を探す女の表現となっていると考えていいだろう。この歌の詠み手については、『拾穂抄』や『萬葉考』によつて男だとする説が提唱されており、最近でも『新全集』の、「女に逢いに行く男の歌が混入したと考えられな

くもない」などの指摘に受け継がれている。しかし、「妹」のために家を出て「白玉」を探しに行つた「君」が、「恋ひてすべなみ」と詠むとは考え難い。また、『新全集』のように「女に逢いに行く」のだとしても、それはモトムムの語義からは外れるであらうし、「家道」を知らない筈もない。ここは、男を待つことに堪えかねてモトメに出た女の歌として素直に読むべきであらう。

もつとも、現在に至るまでこのような異説が出されるのは、次の二首にも原因がある。第三反歌は、「君」が家を出て行く時のことを詠んでおり、反歌の流れを時間の流れに沿つた展開として考えると、矛盾のようにもみえる。

『全注』が、第二反歌で巨勢のあたりまで行つた詠み手が、家まで戻つてきて詠んだことになる指摘するとおりである。しかし、そうではなく、あえて遡らせて詠むことで、追に行くことと待つことの相剋の中、前二首とは異なる可能性としての〈待つ女〉を提示したのでと考えるべきではないか。無理に前の歌からの連続した展開を考える必要はあるまい。

第四反歌は、これまでの三首から一転、「君」を「郎子」と詠んでいる。『萬葉集』では、題詞中の固有名詞以外に「郎子」の例はなく、旧訓はヲ（オ）トメであった。古写本では男の歌として解されてきたのだから。本文について、

『萬葉考』は「今本郎子と有は誤なれば娘子に改つ」とし、誤記である可能性を指摘する。しかし、「郎子」という本文に諸本の異同は認められないことから、諸本に従い「郎子」とするべきだろう。『私注』が「文字のままイラツコとすべきである」というのが妥当である。

宇智は、大和から紀伊へ向かう途中、紀伊との隣接地辺りを指す。この歌は、たとえ「郎子」が紀伊に到達しようとする辺りまで行こうとも、女の待つ思いが強く激しければすぐに帰ってくるだろうことを詠む。その内容は、「妹の山」「背の山」を越えてしまったことを詠む長歌を、第三反歌同様、時間的に遡る。第三反歌で、「戸を開けて」紀伊へと向かう「君」の姿が詠まれていることを考えると、門にいた「郎子」のことをいう第四反歌は、直接には第三反歌に応じるかたちで詠まれているのだから。この歌は、長歌や第三反歌で「君」とされた男が「郎子」となることから、『私注』のいうように、第三者の立場で詠まれていると考えていい。旅立つ男への思いを募らせていく女の姿を目にし、それに唱和したものであらう。

当歌群が問答に分類されているのは、長歌自体が女と夕占の問答になっていることと共に、末尾に至つて詠み手が変わり、唱和が成立していることが、その理由であらう。問答としては変則的なかたちになっていることは確かだが、

第三反歌で時を逆転させ、それに応じる第四反歌という二組目の問答が仕組まれていると考えられる。歌群全体をこのように捉えれば、本稿で問題とする三三二〇番歌は、反歌の中途にありながら、最も進んだ時点のことを詠んだものとして位置付けられよう。

ナヅム・モトムという歌句の違いに注目しながら見てきたが、ここで改めて二歌群を概観してみると、三三二五番歌と三三二〇番歌が、全く異なる世界を提示することに気が付かされる。三三二五番歌は、長歌の延長として、男の歌だと読める。第一反歌で「数々に思はず人は有る」ともしているから、自分が恋い慕う程には思いを返してくれないものの、自分は恋しい相手の為に、困難を乗り越えてでも逢いに来たのだという思いの強さを表明するものなのだろう。この来るという詠み手の方向性は、「直に來ずこゆ（巨勢道）」という序とも呼応する。一方、三三二〇番歌は、長歌で「白玉」を探しに旅立ったという恋しい男を追って、その帰りが待ちきれず、女が探しに行くことを詠んでいる。男が紀伊のどこにいるかがわからないためにモトムと詠んでおり、探し求めに追っていくという詠み手の姿勢が、序の「直に往かずこゆ（巨勢道）」と呼応している。ナヅム／モトム、ク／ユクという歌句異同は、歌群内での歌の意味と密接に関わるものであった。

二首は、異なる表現をもち、それぞれ男の歌／女の歌として、各歌群のなかで安定していた。前節の『古事記』引用の場合同様、左注が、このような歌の違いに気付いていないとはやはり考え難い。しかし、左注は、歌句の違いには言及せずに、二首を同じ歌だとした上で、その同じ歌が別の歌の反歌となつていないことに不審を示す。この態度は、前節の『古事記』を引用するものと同じである。二首を同一歌として認定することで、二首の歌の違いを、同じ一首の歌のもつ多義性として提示しているのだ。それは、同一歌として認定し、積極的に不審を表明することで、ひとつの歌の多義性として、その多義性をあぶりだそうとしているようにも見えるのである。その意味で、このような不審を示す左注もまた、異伝歌を含めて「右〇首」と括る左注と同じような働きをしているといえるのではなからうか。

五 おわりに

以上、二種類の左注を検討してきた。ひとつは、異伝歌を含めて「右〇首」と括る左注である。本伝歌と異伝歌それぞれに長歌（または短歌）と結びついて複数の世界を構築する、そのような現象を統括するのがこの左注である。本伝歌の絶対的優位性によって単一的な歌世界を保持するのではない。本伝歌と異伝歌、それぞれとの組み合わせに

よつて紡ぎ出された異なる作歌事情のどちらとも決められないよう、本伝歌と異伝歌を併せて「右」と括る中に押し込めるのだ。そうすることで、その中において異伝歌に本伝歌と匹敵する位置付けを与え、単一性を揺らがせる。つまり、多義的な世界へと向かわせる。

一方、そのような多義性への不審を示すのが、三二六三番歌や三二五七番歌の左注である。これらは、『古事記』や「古本」、「或本」などを利用しながら、その歌のもつ性質に反して、歌を一義的なものとして位置付けようとしていた。歌が複数の異なる作歌事情と結びつくのは不審ではないからだ。これは、特定の作歌経緯と歌とを結びつけようとする『萬葉集』の姿勢に由来する。

しかし、この場合、ひとつの歌とされる二首の間には、歌句異同が存在する。この異同は、それぞれの歌の表現が属する歌群の中で、他の歌とのより高い親和性をもつよう決定されることで生じるものである。そのことを自覚しながら、敢えて歌句異同を捨象して、同一歌と認定するこの左注こそが、実は「ひとつの歌の多義性」をつくりだしていたのだ。歌の一義性にこだわるのが、逆に歌の多義性を照らし出すという点で、この左注は、謂わば、矛盾的性格をもつ。

題詞をもたない歌の連続する巻十三においては、この二

種類の左注によつて、歌の多義性が見事にあらわされている。そもそも歌は多義的で、一つの表現が複数の意味に解りできたたり、ほんの僅かな表現の違いが、全く異なる歌としての理解を導いたりする。「右〇首」と括り、異伝歌を含んだかたちで歌群を構成する、また、敢えて同一歌の存在を指摘する、そうすることで、左注は、その多義性を具体的に示してみせていた。この行為自体が、巻十三左注のひとつの試みであつたと考える。

注

(1) 村瀬憲夫氏は、この左注形式を用いたのは、一組の異伝歌等を一括して示す意図、「題詞を持たない長歌が列挙される時、その区切れ目が不明確になる怖れがあり、「歌ないしは歌群の区切れ目を明確にしようとする意図」「どこまでが一組の間答歌であるかを明瞭に示す」意図の三点があつたためだと指摘する（巻十三の編纂「萬葉集編纂の研究」塙書房（二〇〇二年二月））。氏は、これら三点の意図を並列するが、そうではあるまい。一つ目こそが重要なのだ。氏は、二点目の意図を説明するにあたって、歌と歌群を同列に扱っていた。しかし、歌群の方は、異伝歌を含むかどうかによつて、巻の性質に影響を及ぼす。巻十三でも、本伝歌群の方に左注を付すことで、本伝歌の優位性を示すことは可能だつた筈なのに、そうはしていないことに注意すべ

きであろう。本伝歌群のみに左注を付した場合、三二八八番歌と三二八九番歌は二点目に抵触する。しかし、三二九〇番歌左注で「右一首」とされ、三二八八番歌には「或本歌曰」の題があることから、本伝歌群三二八五番歌に左注が付されていたとしてもこの間に三首の歌があることは明確である。そして、三二八八番歌は三二八六番歌の異伝歌であり、表記には違いが見られるものの、歌末が「あめつちのかみに(を)ぞあがのむいたもすべなみ」と一致する。これらのことから、歌群の区切れを明確にするためであれば、本伝歌のみに左注を付してもよかつたと考えられる。それなのに、異伝歌も含めて「右〇首」と括るのは、異伝歌に対する独特の姿勢が卷十三にはあるからだろう。

また、氏の指摘する三点目の意図に関しても、特に問題になるのは、三三一四～三三一七番歌であり、後述するように、ここには異伝歌の存在が深く関わっている。本伝歌のみを括ると、歌の分類とずれてしまうからだ。つまり、「右」の範囲に異伝歌を含む形式を選択することとは、歌を並べる上で非常に重要だったのではないか。

(2) 例えば三三〇五～三三〇九番歌の場合、長歌と反歌、それに対する答歌の長歌と反歌が本伝として三三〇九番歌が載せられた後、三三〇五番歌の異伝として三三〇九番歌が載せられている。異伝歌を本伝歌中に挿入するのであれば、三三〇九番歌は三三〇五番歌の直後になければならない。同様の例として、三二三六～三二三八

番歌、三二五〇～三二五四番歌、三二八〇～三二八三番歌、三二八四～三二八八番歌、三三三五～三三三三番歌がある。

(3) 『全注』は、二首が「或本」に収録されているものの、「問答に入れられる歌が少な」く、「編者が多少無理な判断をして問答に入れた」から、不審が生じるのだとする。しかし、そうではあるまい。異伝歌が参考歌に過ぎないとの評価自体が問題なのだ。

(4) 遠藤宏氏は、反歌添加者が長歌との間に何らかの脈絡を認めているとの立場に立つ。それ故、或書反歌の「家出」に出家を見るのであれば、長歌の出郷理由もまた仏教に求められなければならないとする。その上で、出郷理由が仏教的なものだと考え難いとし、或書反歌の「家出」を仏教から切り離す可能性を指摘する(『万葉集卷十三相聞部の反歌について(上)』、『論集上代文学』第二十九冊(二〇〇七年四月))。反歌と長歌の間の脈絡を認める点は首肯できるが、長歌を出家者の詠としては読めないという点には従いがたい。或書反歌と組合わせられた場合、出家はしたものの「妹」に未練を覚えずつ詠んだと考えても不都合はない。

(5) 「右今案、不_レ審_レ幸行年月。」(卷三・二八八)、「右年月不_レ記。但_レ偶_レ從_レ駕玉津嶋也。因_レ今檢_レ注行幸年月以載之焉。」(卷六・九一九)、「右一首或本云、小弁作也。或記_レ姓氏無記_レ名字或偶_レ名号不_レ偶_レ姓氏。然依_レ古記便以_レ次載。凡如_レ此類下皆放焉。」(卷九・

一七一九)、「右傳云、一時交遊集宴此日此處霍公鳥不
喧。仍作^レ伴歌以陳思慕之意。但其宴所并年月未^レ得
詳審也。」(卷十七・三九一四)、「右年月所處未^レ得詳
審。但隨聞之時記載於茲。」(卷十七・三九一五)
など。作歌の時期、作者や詠歌の状況をひとつに固定
しようとするのは、歌が一回的に成立すると考えるか
らであり、そのような注記姿勢にのつとれば、同じ歌
が異なる作者や詠歌時をもつ筈はないということにな
る。

(6) 反歌との結びつきにおいて結句が重要な役割を果たし
ているとの指摘は、今井俊哉氏(『万葉集卷十三におけ
る長歌と反歌―或本歌を中心に―(1)』、『立教新座中
学校・高等学校研究紀要』第三四集(二〇〇四年三
月))に見られる。しかし、「本来挽歌であつた
三二六三を恋歌に読み替えた」とする点には従いがたい。
この句がなく、『記』九〇と同じ歌末であつたとしても、
恋歌として読める可能性はあるからだ。挽歌・相聞と
いう分類は、この歌がどのような文脈と結びつくかに
よって決定されるものではない。

(7) 『萬葉集』には、重出歌は卷十三以外にも複数存在する。
しかし、多くの場合、重出歌の存在に左注が言及する
ことはない。例えば、歌句異同のない重出歌、四三〇
五一一・四八八〇／一六〇六・四八九〇／一六〇七などにも
題詞や左注の言及はない。それは、歌句異同のある、
二七四〇／一二二九・一四二二／一八六五なども同様であ

る。四三〇五一一に關していえば、雑歌と相聞という
部立上の違い―これも歌の多義性をあらわす一例だと
考えられる―が見られるもの、重出とは指摘しない。
その多義性をあらわにするような方向には向かつてい
ないということだろう。左注が同一歌として指摘する
というのは、そこに何らかの意図があつたことだと
考えられる。

(8) 三二六一番歌や三三八四番歌の左注では、長歌と反歌
の歌句の不一致に目を向け、それを修正しようとして
いる。三二六一番歌では、長歌と詠み手が異なってい
るのを、「君」から「妹」へ改めることで二首に共通す
る詠み手の存在を確認する。それは、三二八四番歌も
同様である。長歌の歌句が訂正されているのは、母が
娘の逢瀬を妨害する歌の定型はあるが、息子の逢瀬を
妨害する母が詠まれることはないからであろう。歌の
内容という点で矛盾が生じないよう、長歌を訂正する
のは、単に詠み手の一致だけを目指すのではなく、
和歌知識を背景にしての行為だということになる。こ
のような例から鑑みると、施注者は和歌の内容にも目
を向けていることになる。歌句異同も当然意識してい
たであろう。

(9) かつては「妹」の死を嘆くものとして、『万葉考』な
どに挽歌に収録されるべきものが紛れ込んだものではな
いかと疑われもしていた。しかし、現在では、部立ど
おり長歌を相聞歌として享受するのが一般的である。

例えば『釈注』が、

これは、死以外の何らかの事情で、故郷に置いて来た妻が自分のものでなくなつたことを旅先で知つた時の歌として転用されたのであろう。

死以外の何らかの事情とは、親などの圧力で、妻であつた女が他し男のものになつたという状況が最も考えやすい。

と述べるのは、挽歌としての可能性を排除し、相聞として読むための合理的な策である。但し、詠み手自身の死の可能性を否定しきれたわけではない。「國にも家にもゆかめ」とあり、家郷と断絶した詠み手が、死に向かうという可能性は否定できないだろう。「妹」不在による絶望からとも、家郷との繋がりによる安全の保障が失われたからとも考えられるが、詠み手の先には「自死」があるかもしれない。つまり、長歌単独で読めば、「妹」不在の理由を確定することはできず、相聞とも挽歌とも読むことが可能な多義的な表現だということになる。これも、前節で触れた多義性と同質のものである。

(10) 「具見下也」とあることから、「此歌一首」が『萬葉集』の中に存在し、それが三三一八番歌だというのは動かない。しかし、二首の間にはいくつかの相違がみられる。例えば、紀伊／木や、縁／因といった表記の違いである。また、それだけではなく、歌句も異なる。

拾尔登（ひりひにと）／將拾跡（ひりはむと）といった小異から、「妹乃山勢能山越而」の有無といった、大きな違いまで存在する。それ故、三三一八番歌が「或本」の歌そのものであつたのか、実はそうではなかつたのか、問題を残す。しかし、三二八四番歌左注に、「妹尔縁而者」を「因妹者」と表記を変えて引用する例もあることから、ここは「或本」の歌を指すと見ておきたい（「妹乃山勢能山越而」の有無は左注の省略と考えておく）。「古本」と「或本」では、組み合せられている歌が異なるが、三二五七番歌は「古本」を根拠に「累載」されている。

(11) 今回は特に言及しないが、三句目にイシバシとイハセという異同もある。

(12) 遠藤宏「問答歌」『古代和歌の基層』（一九九一年一月）笠間書院